

ゆつくりと瞼を開いた。少し眠っていたようだった。二、三度瞬いてから手を突いて上体を起こす。ソファの肘置きに崩れかかる格好だった。首を傾けると突っ張るような硬い痛みがあった。ずり落ちかけている眼鏡を押し上げる。口の中が絡むように苦い。それと痺れるようなアルコールのおい。眠気がまだ僅かばかり頭に残っている。シャツの下の肌がうっすらと汗ばんでいた。部屋は全体が夕暮れ時の群青色に沈んでおり隅の方は黒く影に塗られ始めていた。部屋の電気は消えていたが見えない事はない。カーテンの開いたベランダの窓にはぼつぼつと撒いたように外に灯る明かりが映っていた。正面の壁に掛かった時計を見ると七時近かった。目の前の折り畳み机に視線を移した。三本のビール缶。一本は倒れて机の角に転がっている。破けて空になったつまみの袋。灰皿に入った数本のマールボロの吸殻。それとまだ中身の残っているその箱。ライター。開いた白の封筒から手紙の端が覗いている。

柿原の姿はなかった。彼の姿の消えた右隣を見た。コンビニのビニール袋がくしゃりと丸められて転がっていた。俺が酔い潰れてすぐに帰ったのだろうか。彼が飲んだ分のゴミはどこにもなかった。背凭れに腕を置いて影の懷に隠れた玄関へと続く廊下を振り返った。それからおもむろに立ち上がった。足を踏み出すと頭を揺すられたようによろめく感覚があった。しつかりと床を踏み直す。まだ酔っていた。どの程度かは分からない。狭いキッチンに入ってグラスを手に取った。水道から水を注ぐ。後ろの冷蔵庫に背を預けて一息に半分以上飲んだ。息を吐く。後頭部が緩やかに疼いていた。ゆつくりとグラスを傾けて残りを飲み干すとシンクに置いてキッチンを出、ソファに戻った。浅く腰掛け背凭れに頭を乗せて群青と影に分かれた天井を見上げた。が、すぐに上体を起こし前のめりになった。頭を低く下げて項垂れ目を閉じる。同じリズムで繰り返される自身の呼吸音。秒針の囁くような音。そのままじつとしていた。十分程そうしてから目を開き顔を上げて机を見た。マールボロの箱を手に取り一本銜えた。そして手を伸ばし封筒を手に取った。中の手紙を引き出して広げる。もう暗くて字が読みづらい。紙面に目を這わせた。末尾の署名まで目を通すと豊んで封筒に仕舞った。片手でそれを持ったままライターを取る。かちりと点け炎を銜えた煙草に近付けた。紫煙の匂い。それから点けたままの炎に封筒の角を舐めさせた。ライターを机に放る。つややかな橙色の光に封筒が包まれ始めるのを、角から形を失っていくのをじつと眺めた。それから灰皿の上にそれをかざした。

* * *

高校二年の夏だからもう四年前になる。七月二十七日からの二日間。今のところまだたいいていの事柄は思い出せる。もしかしたら収められた記憶のどこかに齟齬があつてそうとは気付かれないまますでに新しいピースとして当て嵌まっているかもしれない。何を目にし、聞き、何を肌感じたか。胸の中でどんな思いを抱え、持て余して転がしていたのか。あの頃の俺は、コンクリート壁の間に落ちた日陰のように仄暗くて、例えようなない匂いにするものを見つめていた。自分の内と外に。眩しかった。少なくともそう感じていた。白い陽光に重ねられるくらいに。

* * *

弾かれるように目を開いた。うつすらと色のついた朝日がカーテンの隙間から漏れ出て天井に広がっていた。薄い毛布をかけていたが額や背中、汗が浮いているのが分かった。毛布を体から取り払って脇へどかす。ベッドと接していた背中側に熱がこもっていた。口の中が乾いていて苦いとも酸っぱいともつかない味がした。おもむろに足を曲げ体を横にして丸まった格好になった。そのままの格好でしばらくじっとしていた。やがて枕から少し頭を上げ手を伸ばして時計を手に取った。【04:51】と数字が表示されていた。日の出からきつと間もないのだろう。六時半に設定した目覚ましを鳴るのはまだ先だ。無造作に時計を戻す。さつきまで夢を見ていた。目も閉じず机を見るときもなしに見たままその事を考えた。だが一度後にした夢はなかなか元の形をとつてくれない。再現できるのは青にいくらか他の色が入り混じっただけのシーンだった。誰かが何か言っていた気がした。どんな声だったか。どこかで見た事のある景色かもしれなかった。思い出さなくてはという気持ちがあった。だが諦めた。細く、短く息を吐く。指先に触れたシーツの皺をなぞった。その時水が湧くように胸の中に滲んでいくものがあった。これが初めてではなかった。静かに湛えられていくそれにそつと指を伸ばす。

三十分程して再び浅い眠気を感じ始めた。引かれるように瞼を閉じうとうとしていた。それから目覚ましの音で叩き起こされた。

階段を下りると父がマグカップ片手に壁に寄り掛かっていた。俺の方を見ておはようと言いかップの中身を熱そうに啜る。俺もおはようと返し彼の傍をすり抜けてキッチンに入った。一抹のコーヒーの匂いがあった。グラスに冷たい水を注いで飲む。欠伸。それから棚を開き食パンの袋を取ると、お前の分も用意してあると父の声がした。

「ありがとう」食卓に向かうとトーストと目玉焼きの皿、ヨーグルト、牛乳、ジャムの瓶が並んでいた。椅子に座ってジャムの蓋を開けてから思い直して立ち上がる。リモコンを取って壁際のテレビを点けると情報番組が映し出された。

「行儀が悪いぞ」

そうは言うものの父も画面に目を注いでいた。俺は席に戻ってトーストにジャムを塗り始める。どうやら一週間程暑くなるようだった。明後日には三十五度を超えるらしい。向こうはあまり暑くないだろうか。

「そういえば」と父。

「藤田さんってどんな人なんだ」

反応が一拍遅れた。今まで一度も訊ねられた事がないのに、出し抜けだった。ゆっくりと口の中のを呑み込んでから父の方を振り向く。「——普通の人だけだ」

父は目でそうかと応じたときり何とも答えなかった。僅かな間沈黙が降り番組の音声だけが二人の間に流れていた。俺はテレビに目を戻したがすぐにまた振り向いて「どうした？」と訊き返した。いや別にといい返事。

「ただ気になっただけだよ」

彼はマグカップを傾けてコーヒーを飲みきると階段に向かって二階へ消えた。俺は目玉焼きをつつきながらまあ気になるだろうかと考えた。今まで彼女の事を訊ねられたことがなければ自分から話した事もあまりないし父は会ってもいない。少しだけ藤田の顔を思い浮かべた。それからそくさとヨーグルトを食べ終えると立ち上がる。テレビを点けたままキッチンで食器を洗っているとワイシャツに着替えた父がリビングに現れた。

「父さん、後で何か作っておくから夜はそれ食べて」

「いいよ、お前間に合わない」と困るだろ。夜は適当にどっかで食うわ」
それからハンカチを取り出して眼鏡を拭くと、

「明日いつ頃帰ってくる？」

「うーん、午後としか」

「そうか。暑さには気をつけるよ」

彼は眼鏡を掛け直してカフスボタンを留めた。そのまま壁際の仏壇の前へ歩いて行き、行ってくるよと声を掛けてから鞆を持って玄関へ向かった。ドアの閉まる音。それに合わせるようにニュースが切り替わった。洗い終えた食器を片付けながら体を屈めてリビングの時計を見やる。まだ時間はあった。ふと二日前に書き上がった小説の原稿を思い出した。今日持つて行つて柿原に渡す約束だった。何故わざわざ今日という気持ちがないわけではなかった。だが同時に柿原の思いも分かっているつもりだった。あれは俺たち二人以外が読むべきものではなかった。藤田も例外ではない。タオルで手を拭いてキッチンを出る。自室には戻らずリビングのソファに腰を下ろした。テレビの画面をぼんやりと目でなぞる。コメンテーターの声。音量を下げた。蝉の声がしているのに気付き窓の外を向いた。それからすっと目を戻す。

藤田は普通だ。父へだけでなく他の誰へも、それ以外に何が言えるだろう。誰も藤田の事など知らない。彼女が普通であり続けようとしていたからだ。彼女は眩しかった。俺にとって何よりも。

自室に戻つて机の引き出しを開きホッチキスで留めた原稿用紙の束を取り出した。二つ合わせて七十枚程だ。椅子に座りシャーペンを手にとってばらばらと繰り始める。目に留まつたところを読む。また繰る。読む。もう一度周りも含め読み直す。ぞんざいに消しゴムで消しシャーペンを走らせる。別のページを開く。線を引いて一文を消す。読み直す。次のページへ。もう一つの束を広げる。

いつの間にか家を出る時間まで間もなかった。束を揃えてクリアファイルに仕舞い机の脇に掛けたリュックを開いて押し込んだ。手早く着替えてから部屋の隅に置いたスポーツバッグを開いた。元は父が買った物で大分古くなったバッグだ。中身を一通り確かめた。とはいっても荷物は少ない。リュックを背負いスポーツバッグを肩に掛けて部屋を出た。階段を下りるとリビングに向けて行つてきますと声を投げた。声を投げてから立ち止る。リビングの方にじつと視線を向けた。ふと言葉を続けようとするように口を開いた。言葉は出てこない。何を言おうとしたのか自身でも分からないまま、体の内側を突いたものが喉の辺りでつかえている。俺は目を外し黙つて玄関へ歩いた。

アスファルトに降る日差しは既に尖り始めていた。団扇でそつとあおがれているような風を腕に感じる。蝉が鳴き続けていた。一羽か二羽かそのくらいだろう。聞こえるのはそれだけだ。住宅街に人の姿はなかった。脇を車が通り過ぎて行つた。タイヤがアスファルトを噛む音。巻き上げられた地面の空気は微かに埃っぽかった。道路を挟む生垣の葉のグリーンが濃い影に縁取られている。駅までは徒歩よりバスに乗った方が良さようだった。十字路を曲がりバス停へと足を向けた。

車内には俺の他に三人だけ乗っていた。丁度良い具合に冷房が効いていた。一番後ろの席を選んでリュックを下ろしスポーツバッグを隣に置く。新しい塗料のにおいが一瞬だけ鼻先を掠めた。バスが発車するとシャツの内側に籠り始めていた吐息のような熱気が徐々に引いて行つた。窓の外へ顔を向けた。横に並んだ一台の自転車がやがて追い抜かされていった。顔見知りのような気がして首を捻じったがもう自転車は見えなかった。次のバス停でバスが止まった。三人連れの小学生たちに続いて柿原の姿が現われた。彼はこちらに気が付くと片手を上げてからやって来て俺のバッグを挟んで

腰を下ろした。

「君それ暑くない？」

「あ？」

「その黒い服見てるだけで暑苦しくなってくるんだけどさ」

「良いだろ別に」

「まあでもあっちの方はちょっと涼しいらしいね。海風が気持ちいいんだろ？」
それから彼はリュック脇のポケットから水筒を抜いて一口飲んだ。からんと軽やかな音がした。「ああそうだ、あれ持ってきた？ 君の原稿」

「あるよ。今渡すか」

「うん、お願い」

足の間に置いたリュックを膝の上に引っ張り上げてクリアファイルを取り出す。

「何ページくらい？」

「七十から八十ってところ」

「また全部手書きか、すごいな」彼はファイルから束の端を出してぱらぱらと繰った。
「ありがとう。帰ってきてから読むよ」

大分前から俺の小説は彼に気に入られていた。手書きで読みづらいのも構わず彼は完成した作品をすぐに読みたがった。俺が何を思っペンで走らせるのか、そして俺の中に横たわって匂う仄暗い影のようなもの。柿原はそれを知っていた。

「お前寝たのか、ちゃんと」

口許を押さえる彼を見てそう言った。バスの中にいた時から柿原は何度か欠伸をしていた。そして今また。彼は口を閉じると大きく伸びをした。

「早めに寝ようとはしたんだけど」

駅構内、改札の前での待ち合わせだった。スポーツバッグを提げた学生たちが十数人程近くに固まっていた。運動部の合宿だろう。親子連れがスーツケースを引いて通り過ぎて行った。六、七歳の男の子が足早に券売機へ向かい背後から母親にたしなめられている。

「眠いならコーヒー買ってこい」

「いやいい、大丈夫。今何時？」そう言って彼は俺の左腕を掴んで文字盤を覗き込んだ。待ち合わせの時間まであと十五分あった。柿原はぐるりと構内に目を巡らせてから「ちよつと何か買ってくる」とバッグを残して改札横のコンビニへ歩いて行った。俺はもう一度腕時計を見てから腕をだらりと下ろした。手持ち無沙汰にリュックを下ろして開いた。家を出る前に一度中身をチェックしたものの、こういったのは何度か確認しないと済まないたちだった。揃っていた。デジタルカメラを出して電源を入れてみた。何年も使ってなく前日支度をした時も動作を確かめていなかったが問題なく動いた。それを仕舞ってファスナーを閉じた。それから何気なく辺りを見渡すと下のバスターミナルからの階段を上った所に藤田の姿を見つけた。彼女は五、六歩歩いてこちらに気付き手を振った。振り返す。

「おはよう」

「おはよう。それ柿原君の？」

「ん。あ、来た」

丁度彼がコンビニから戻って来るところだった。ビニール袋を提げていた。互いに挨拶を交わすと柿原はリュックに袋を仕舞ってから地面のバッグを持ち上げた。「行く」

「ごめんね、待たせちゃった」

「僕らもさつき着いたばかりだよ。ああ、それ似合うね」柿原は後頭部を指す仕草をした。いつもは肩にかかっている藤田のセミロングの髪が今日は後ろでまとめられていた。

「ありがとう」

「柿原君の叔母さんってお菓子好き？」

「好きというか、目がないというか。どうして？」

「椎葉君と叔母さんへのお土産決めて持ってきたから。口に合えばいいと思って」

「それは喜ぶだろうな。何買ったの？」

「最中。ほら、駅の近くで売ってる店あったろ」

「あそこか。あの店のお菓子美味しいよね」

電車内はそれなりに席が埋まっていた。俺たちは荷物を網棚に上げて並んで座っていた。反対側の窓から見える景色はまだ見慣れたものだ。いつも通学に使う路線だった。遠く、地平線上の水溜りのように灰青色の海が横たわっていた。普段ならあと二駅で降りるのだが今はあと五駅だ。

「椎葉君、小説はどう？ もうすぐ書き終わりそう？」

「まだもうちょつとかかるかな」

「今何字くらいだったの。三万とか？」

「うーん、もうちょい少ない」

「ふーん。読みたかったな」

学校の最寄駅を過ぎた。高校入学以来ここから先へ行くのは初めてだ。街の風景が遠ざかっていく。路線から離れて建つビルのガラスの壁面がフラッシュライトのように光った。それからしばらく走ると霧囲気が変わり、戸々に同じような色合いで統一されたみたいに見える住宅地が過ぎ去った。あとに眼下に続く景色も似通った霧囲気をしていった。高速道路との並走。電車と同じくらいのスピードで走る青い車。

「次で乗り換え？」

「いや次の次」

「そうそう、二人とも。今夜向こうの町でお祭りがあるって叔母さんが言ってたけどどうする？」

「本当？ ラッキーじゃん」

「寄ってこうか」

乗り換えた電車を降り階段を上って反対側のホームへ行く。ついでに自販機で麦茶を買った。電光掲示板を見上げると次の電車は八時三十七分だった。あと十五分程ある。ホームに人の姿は少なかった。自販機の隣、やや錆の浮いたベンチで同じ年くらいの少年が一人文庫本を開いていた。何とはなしにホームの奥の方へ移動した。

「ホームの端ってなんかいいよね」

「そうなのか？」

「えっと、線路の続いている感じがってこと？」

「それもそうだし、あと線路の周りの開けた風景とかも」

「ここだとあまり見えないけど。遮られてる」

「そういえば映画でこんな感じのシーン観たことある」

「あー言われてみれば・・・何だっけ？」

「北野武？」

「違うだろ。白黒だったような気がする」

「小津安二郎」

「分らないな」

「詳しいね二人とも」藤田は笑っていた。

「どうした」

「なんか面白いなあって」

「面白いのか？」

車内の様子、つまりシートの配置などが普段見慣れた路線のとは違っていて、ああ旅行に来たんだなという些細な感慨を抱いた。発車まであと数分。半開きになったドアをみてそういえば手動で開閉できるんだなと思いつく。向かい合った四人掛けのシートに揃って座った。頭上の蛍光灯が羽虫みたいにじじつと瞬いた。奥で年配の男性が二人談笑しており囁れた笑い声が聞こえていた。あと五駅で到着だった。

ホームに足を降ろすと同時にそよ風が撫でていった。油っぽいと言うのだろうか、これまで訪れた人々を示す跡を見させている狭いホームにはそんなにおいがどこことなくしていた。それから潮のにおい。遠くない場所に気付くかどうかといったくらいに。ホーム際の柱に張り付けられた駅名表示にカメラを向けた。それから背後の二人にも呼びかけてシャッターを切る。改札を通り構内を出ると、なるほど心持ち暑さが和らいでいるようだった。注がれる日差しは変わらないが木の葉の揺れない程度の風が心地よかった。高く空に刷毛で描いたような雲が伸びていた。一台のワゴン車が車道を下っていった。下っていく坂道が幾分高い位置に建つ駅舎の目の前に延び、どれも同じくらいのサイズの建物が屋根を見せて広がっていつているのが眼下に眺められた。その間を走る電線、黒く舗装された道路。右奥の方には新品のインクを被せたように緑の覆う山裾が町を海に押しやるみたいにならずくまっていた。再度カメラを掲げた。坂道は急だった。柿原、藤田、俺の順に縦一列で下った。真ん中あたりでペットボトルに残った数口分の麦茶を飲み切った。蜂の羽音。坂が終わり平坦な道路になると右に曲がって町の建物の間へ入っていく。途中道路の交わる角で目にした店でアイスクリームを買い店の前のベンチで食べた。旅先で食べるアイスクリームが普段のより美味しいと、柿原と藤田が言っていた。真つ直ぐ続いている道路のずつと奥で逃げ水が揺れていた。それからまた歩く。方向感覚には自信がなかったが多分海が近づいているのだろうか。風は潮の気配を帯びていた。やがて額に薄く汗が浮いた。ハンカチを出して拭いた。

目的の民宿に着いたのは十三、四分程歩いた頃だった。それなりに年を経たのであるうダークブラウンの壁。こじんまりとした木造だった。ガラス張りの引き戸を柿原が開きそれに続いて入った。受付の四十代くらいの女性が顔を上げてこちらを向いた。ふわりとその口許に笑みが浮かぶ。「いらっしやい」

「こんにちは叔母さん、お世話になります」柿原も笑って応える。

「一也くん、見ないうちに背伸びたね。そちらのお二人は椎葉真記さんと藤田秋生ちゃんね。柿原千尋といいます」

二人そろって挨拶をし藤田が手土産の袋を手渡した。最中と聞いて嬉しそうだった。それから近くで美味しい鯛焼きを売っているからあとで全員分買ってこようと付け加えた。彼女は受付の後ろに回って鍵を取ると先に立って俺たちを案内した。小さく軋む階段を二階へ上る。張り替えたばかりであるう真新しい廊下。

「一也くんと真記くんはこっち、秋生ちゃんはこっちの部屋。荷物置いたらゆつくりして。このあとはどうするの？」

「榛前山に行つて散策してから海に寄ろうと思つてます。あと今夜のお祭りにも」
「あらそう、じゃあ一也くん、和辻さんのとこ分かる？ あそこで船に乗せてもらつたら？」

「うん、そのつもりですよ」

襖を開くと南向きの窓から畳に陽が斜めに差していた。八畳くらいの部屋だった。奥に青く連なつた波が覗いていた。リュックとスポーツバッグを隅に置いて伸びをする。外とはちがつて部屋の空気は乾いた雰囲気がした。もう一度浮く汗を拭いた。それから胡坐をかいて座りリュックの中を整理した。カメラで今しがた撮つた写真をチェックする。柿原が肩越しに覗き込みこれ綺麗だなと改札を出た場所で撮つたのを指差した。「二日間頼んだよ、カメラマン。帰つたら僕にも写真頂戴」

俺は頷いた。抜くように息を吐いた。畳の目に沿つてぼんやりと指を滑らせた。一息つき十分くらいしてから部屋を出て一階へ下りた。千尋さんが三人分の弁当を準備してくれていた。山まではバスで向かうことにした。ふと仰ぐと民宿の屋根の縁から一本の飛行機雲がくつきりと伸びているのが見えた。民宿からバス停は目と鼻の先だった。時刻表に書かれた、二十分くらいの間隔を空けた時刻。並ぶと数分でバスが到着した。低く唸る音の割に申し訳程度の冷房が効いた車内。

砂利が敷かれた遊歩道の入り口。木陰に覆われていた。風は然程通らないが心地よい涼しさだった。町とはまた違つた空気を吸い込んだ。陽光を受けた頭上の葉の緑が透き通るように滲んでいた。鳥がさえずるのがちらりと聞こえた。が、すぐに蝉の声の間に紛れていった。砂利を踏む三人分の靴音がした。他に散策に来た人の気配はなかった。他のどの場所とも切り離されたみたいに静まり返つて蝉の立てる声が一層それを際立たせていた。他に存在を感じられる唯一のものであつた。三人の間で時折交わされる話し声が空気に染みていく。木で組まれた階段を上つた。遊歩道から少し外れた所に髭のように絡まつた老木の根が剥き出しになっていた。白い斑点のようなものはおそらく茸だろう。立ち止つてカメラのフレームに収めた。また少し進むと二手に道が分かれていた。左を選んで進む。すると急に人が一人通れるくらいの道幅となつた。両脇から野草の葉が押し出されている形となり進むにつれて狭まっていくのはと一瞬思つた。野草の間に蜘蛛が一つ巣を作つていた。先頭の柿原が後ろを向いたので揃つて引き返した。「残念、はずれ」

二手に分かれる前の、元の場所に戻つてみるとさつきは見逃した案内板が立っていた。どれだけの期間ここに佇んでいたのかと思わせる古びたものだった。いたる箇所でも木材が傷み字も掠れかかつていた。この先また道が分かれるそうだ。一方は展望台へ続きもう一方は下手に流れる小川に出る。その場を後にして歩き出すと案内板が再び元の通りに一人佇んで残された。

分かれ道では展望台の方を選んだ。途端に勾配が急になり階段がずっと上の方まで連なり始めた。三人とも口数が少なくなり存在を示すものは靴音だけになった。三十代くらいの男性と一人すれ違つた。互いに身振りで階段を譲り合つた。俺はお辞儀をして彼の前を通つた。それなりに上つた所で階段は途切れた。藤田はくるりと振り返つて上つてきた所を見下ろし高いと呟いた。やがて道の両側を覆っていた樹木がぱつと開けた。展望台は木のテーブルとベンチがあり前を腰の高さくらいの鉄柵で囲われたスペースだった。三人で柵に近付いた。手前に町が望めて、奥には横たわる海。町は海と同じくらい平らで荒い砂粒をばら撒いたようだった。下で電車が走っているのが細く見えた。筆で混ぜたような白い波。コントラストの強い静止画。風が思い出したように吹いた。しばらく黙つたまま景色を眺めていた。足元で草の擦れる音がした。

それから木のベンチに揃って腰掛けた。野草が風に合わせて頭を揺らしていた。

しばらく経って引き返した。やや慎重に階段を下りた。展望台までは届かなかつた蟬の声が再び俺たちを迎えた。ゆっくりと道が分かれる場所まで立ち戻った。そして小川の方へと下って行った。今度の勾配は然程急ではない。話し声がまた戻ってきて砂利を踏む音の間を繋いだ。やがて百メートルも歩くとせせらぎの音が耳に届いた。木立の切れ目から町で走っていた車みたいに緩やかに流れているのが窺えた。ほとりに出るとすぐ近くにさつきと同じテーブルが据え付けられていた。そこに座ってリュックを肩から降ろした。古そうなテーブルだったが傷みはそれほどでもない。小川のほとりだからというのもあってか木陰のもとに軽やかな涼しさがあった。水筒を傾けそれから弁当を取り出した。昼食を終えると柿原が俺のカメラで俺と藤田を撮った。レンズにぎこちなく笑った。撮られるのは幾らか苦手だった。撮れたのを覗き込んで藤田は顔が硬いと俺に笑った。彼女の手にはカメラが渡り俺と柿原を撮影した。裸足になって小川に入ってみた。ひんやりとした流れが踝までを包んだ。足の裏に半分埋まった小石が当たる感触があった。摺り足で歩いてみる。ぴちゃりと水滴が跳ねる音がした。上体を屈めて水をすくい上げ、掌を傾けてこぼした。

「この場所、いいなあ」
隣で一緒に小川に入っている藤田がそう呟いた。

バスで町へ戻った。先程までのどことも切り離されたような静かさが背後でどんとんと距離を開いていく。それから涼しさも。鳴き声も。バスの中は相変わらずむつとする陽気が籠っていた。薄く掻き傷の付いた窓の外に時折ちらちらと視線を泳がせた。榛前山へ向かう時も通った交差点で—— 民宿の近くだ—— でバスが止まった。降りた。このまま歩いて海へ行く。午後に差し掛かった夏の熱気、曝されたアスファルト。進む道路の先には大きく日陰が落ちていた。途中で真っ直ぐな石畳の敷き詰められた広場の傍を通りがあった。それなりの広さだ。周りを囲う道路。空き地。そこに近づくにつれ家屋や建物は減っているようだった。広場では縁日の準備が進められていた。既に設営された屋台もあった。照明となる一列にぶら下がった提灯が掲げられていた。中央ではどうやら櫓が組まれているようだった。

十数羽の海鳥の群れが一斉に飛び立った。海面に照る光が揺れてさざめいていた。潮のにおいに乗せたコンクリートの地面。漁船がいくつか泊まっていた。機関部を連想させる油っぽいにおい。唸るような音が断続的に低く鳴っていた。波止場を真っ直ぐ行った奥には狭いながらも流木などが打ち上げられた砂浜があった。犬を連れた親子の姿があった。そちらに一瞥を投げてから柿原の後に付いて短い栈橋の方へ歩み寄った。事務所のようなものが建っていた。人影が見えた。柿原は窓からちらりと中を覗きドアを叩いた。出てきたのは百六十センチくらい、六十代に届くかといった男性だった。

「お久し振りです、和辻さん」

彼は目を細めて柿原の顔を見、途端に破顔した。一也くん何年振りだろう、と張りのある声で言いそして元気にしてたかいと付け足した。それから目を俺たちに向けた。柿原に紹介されて俺たちはお辞儀した。和辻さんはまた笑い手を差し出してきた。手を握った。ごつごつとした関節の感触。人差し指の付け根あたりにできた染み。彼からは煙草のにおいがした。柿原が船に乗せてもらえるかと訊ねると和辻さんは二つ返事で引き受けた。

エンジンの震える音。船尾から攪拌された海水が太い筋を作って広がっていった。三

人で船縁によりかかり波止場が遠ざかってゆくのを眺めていた。また海鳥の群れが海面近くを飛んでいた。ふと横の藤田を向くと彼女は真下の海面にじつと視線を注いでいた。その視線をなぞるように俺も目を落としたがそこには淡くくすんだ群青以外何もなかった。顔を上げて遠い水平線を見つめた。ぼんやりとした一本の線で空と隔てられていた。船縁から体を離し近くの引つくり返った木箱を椅子代わりにした。再び落ちてきた沈黙。先程見ていた方とは反対側にもう一艘の漁船が浮かんでいた。やがて船が止まった。エンジンの唸りがさらに低まった。船室から和辻さんが三人分の釣竿を抱えて現われた。ほれ、と渡されたそれを受け取ってまじまじと見る。初めて手にした。柿原はどうやら経験があるようで釣り糸を手早く解いた。

釣りの成果は芳しくなかった。ただし俺だけだが。柿原はまず和辻さんから簡単にアドバイスをもらいその後は五匹釣り上げた。藤田と俺は一緒に和辻さんのレクチャーを受けて釣竿を握った。俺の場合は手応えがあっても引き上げてみると何もかかっていない。結局貰った釣り餌がなくなる間際に小魚が一匹釣れただけだった。一方藤田は初めに三匹立て続けに釣りその後は一向にからなかった。俺の釣った小魚を見て笑う藤田と柿原に、俺はわざと慥然とした表情をした。和辻さんは獲れた魚をクーラーボックスに放り込むと釣竿を抱えて船室に戻った。ゆつくりと船首が転換し始めた。やがて波止場目がけて船は波を掻き分け出した。

「楽しかったな」

「うん」

棧橋に戻るとクーラーボックスを抱えた和辻さんについて事務所に入った。彼は鼻歌交じりに部屋の隅の流しに歩み寄るとボックスを開けてまな板に魚を乗せ洗い始めた。包丁を手にし腹を一直線に切って内臓をかき出す。それから串を通し塩をかけて焼いた。いい匂いがした。紙皿に乗った二つの焼き魚を三人で箸でつついた。塩がしつかりと効いていて美味かった。獲れたてはいいだろうと和辻さんは言った。

波止場に面して崖のように立つ数メートルのコンクリート壁、そこに設けられた階段を上った。棧橋では事務所のドアの前で和辻さんが手を振っていた。こちらも振り返した。それから車道を横切って道の反対側へ移動した。道路際にいた雀が驚いて飛び立った。波止場を後にする足取りはゆつくりとして急ぐ気配もなかった。するべき事が一つも迫いかけてこないみたい。それもそのはずでこの後の縁日は午後六時から始まるのだがそれまで時間があった。それでももう浴衣姿の人とすれ違った。

民宿に戻った。他の客が来ている気配は依然としてなかった。出迎えた千尋さんは紙袋を手にしていた。近くで買った鯛焼きだった。先程焼き魚を食べたばかりだったがどのみちしばらくする事もないのでのんびり食べようと紙袋を受け取った。買ったばかりなのだろう、まだ袋は温かかった。二階に上がると俺と柿原の部屋に藤田も加わって思い思いの位置に座った。柿原が冷房を点けた。エアコンの静かな稼働音。座卓に紙袋を置いて鯛焼きを一つ掴んだ。頭を嚙った。ぱりつとした皮にはみ出る程餡子が入っていた。二人に食べるかと問いかけたが今はいいと同時に返事が来た。

五時を回った頃に民宿を出た。足は広場とは別の方角へ向いた。柿原を案内人に散歩だ。午後の日はまだまだ低くなかったが路上にわだかまる熱気はいくらか和らいでいた。海に出ている時は凧いでしたが再び風が立っていた。この時間になると道行く人の足取りにもどことなくゆつたりとした気配があるような気がした。未だせわしく鳴き続けている蝉とは対照的だった。ふと横に目を流すとショーウィンドウに映る三人の姿が目に入った。藤田も同じ方を向きガラスに近付いた。並んで覗き込んだ。四本の足が付いた箱。小さなハンドル。側面の細やかな装飾がきらりと光った。オルゴール

ルだろう。どうやらアンティーク店のようだ。藤田が傍のドアを押した。彼女に続いて入った。ちりとドアベルが鳴った。商品の陳列棚を見ると他に万年筆や懐中時計、万華鏡などが並んでいた。ケースに入れずそのまま置かれた商品も多かったがいかにせん触れるのが躊躇われるものばかりだった。いかにもと言うのだろうか、橙の照明に照らされた店内全体が微かに埃っぽい匂いを含んでいた。その雰囲気もあつてかい見入ってしまう。

「このペン綺麗だよね」藤田がいつの間にか隣にいた。

「欲しいなあ」

「気に入ったのでもあつた？」柿原も隣に来て言った。

「プレゼントしてあげようか」

「高えぞ」

浴衣を着た人の姿が路上にちらほらと現われるようになった。腕時計を見ると五時五十三分だった。まだ街灯が点くには早かった。陽の色が変わり始めていた。東の空が徐々に濃くなってきていた。広場からやや離れた場所にいた。そぞろ気といった風で足をそちらへ向けた。昼間は見かけなかった数の人影が巣に帰る蟻みたいに広場を指していた。

数時間前に通りがかつた時とはすっかり面変わりしたような印象を受けた。広場の上に張られた提灯の列が灯されていた。黄色や赤の屋台が立ち並んでいた。風がそこから匂いを拾って運んできた。中学生くらいの数人連れがはしゃいだ声を上げていた。腕を組んだ浴衣の男女がいた。波立つような喧騒。人混み。両親に片方ずつ手を引かれた少女が駆け足で傍を通り抜けて行った。縁日に来るのは久しぶりだった。すぐそこにあつた屋台でラムネを買った。ビー玉のからんという音。思ったよりも炭酸が強い。

陽が沈んで空は黒く塗りつぶされた。街灯の白光に蛾がふらふらと引き寄せられていた。広場を離れると途端に先程までの喧騒が弾けたように消えていった。誰もいない坂を三人とも黙ったまま上った。ノイズのような蝉の声はもうない。草むらから耳鳴りのように聞こえる静かな鳴き声が一定の調子で空気を震わせていた。疼く熱気も浚われるように姿を消していた。シャツの中にじつと籠っていたのもだ。首筋の汗が引いていた。あちこちの窓で漏れる明かり。海は暗闇の中に沈んでいた。

民宿に戻ると千尋さんに夕食はどうするのか訊ねられた。程々に食べていたので今日はまだもう食べないと伝えた。千尋さんに頼んでバケツを借りた。そして庭に出て隅に据えられていた水道で水を張った。手持ち花火の袋を破って地面に置き中身を広げた。俺が縁日の射的の景品で取ったものだった。線香花火がほとんどで一つだけススキ花火が交じっていた。俺たちはそれぞれ一本ずつ手に取り順にライターで火を点けた。ちりちりとつややかに跳ねる閃光。じつと目を注いだ。なるべく手を揺らさないように持つ。藤田のは松葉に至る前にほとりと落ちた。柿原のは火花が大人しくなつたと思ふと落ちていた。俺のは最後まで燃えていた。次の火花を拾った。囁くような虫の声に火花の音がそつと重なった。何でもない、些細な事の切れ端みたいな言葉を時折思い出しては交わす。視線は各々の火花に向けられていた。やがてすぐにススキ花火だけが残された。拾い上げ、端を握って点けた。乾いた音を立ててそれは赤く爆ぜ始めた。そして白っぽく。緑。最後に黄色になった。

目が覚めて枕元の時計を見ると七時を過ぎていた。隣で柿原はまだ眠っていた。一度

体を起こして目を擦ったがまた頭を枕に戻した。仰向けになり天井を見上げた。今度は夢は見なかった。その代わり仄暗いものの匂いだけが胸中にあつた。二十分くらい目を開いたままじつとしてしていると柿原がもそもそと動くのが聞こえた。俺は立ち上がってカーテンを開いた。彼も布団から体を起こしさっさと着替え出した。俺も彼に倣ってジャージを着替えた。それから洗面所へ入って顔に冷たい水を浴びせた。戻って眼鏡を掛け布団を畳んだ。一階へ下りると藤田はもう朝食に手をつけていた。後ろで千尋さんが茶碗にご飯をよそっていた。盆に乗った朝食を受け取り席に着いた。朝に和食というのも久し振りだった。白米も味噌汁も熱かった。

食べ終えるとまた三人で部屋に上がって一息ついた。昨日一日で俺の撮った写真を二人に見せた。全部で二十数枚。縁日の写真はぶれたりしてあまり上手く撮れていないのも三、四枚あつた。よく撮れてるじゃんと藤田は俺と柿原が映った写真を指差した。それから俺たちは服をスポーツバッグに詰め込んで荷物をまとめた。忘れ物がないか部屋を見渡し空になった。ペットボトルを捨てた。

引き戸を開いて外の道に出た。まだ気温は然程高まつていなかった。空模様はさつと軽く灰を引いたみたいだった。晴れとも曇りともつかない。玄関で見送る千尋さんにお辞儀をした。

「ありがとうございます」

「またいつでも来てね。気を付けて帰るんだよ」

また軽くお辞儀をしてから民宿を背に歩き出した。風は静まっていた。町は動き出しており昨夜の熱っぽく浮ついた気色はどこを探しても見当たらなかった。交差点の角を曲がって民宿が見えなくなった所で藤田は足を止めた。彼女を向いた。

「それじゃ、私はここで」

ゆっくりと目が覚めたばかりのように走る軽自動車が傍を通り過ぎて行った。交差点の信号でブレーキランプが赤く灯った。

「じゃあね」柿原が掌を挙げた。藤田は同じ仕草で応じた。

「じゃ」俺はそれだけ言った。彼女は俺にも小さく手を振った。

踵を返し駅とは別の方向へ遠ざかっていく藤田の後姿を二人で見送った。一度も彼女は振り返らなかった。向こうから歩いてきた女性が俺たちを見てすれ違いざま訝しむような視線を投げてきた。やがて藤田が角を曲がって見えなくなると俺たちはどちらからともなく再び駅へと足を動かした。昨日の行程を逆に辿って帰る。その日はそれだけが残されていた。

最寄り駅で柿原とはおざなりな言葉を交わして別れた。バスに乗らず自宅へとは違った方角へ少し足を運んだ。何をしてもなく歩いた。向こうとは似ても似つかない街並み。こちらの天気は晴れていて湿度がむっとするほど高かった。足を前に出す度肩のバッグが腿に当たるのが今更気になった。家に着く頃にはリュックの被さった背中が汗に濡れていた。

その報が届いたのは帰宅して二日後だった。藤田の遺体が発見されたという知らせを電話口で聞かされた。その日のうちに俺の家に警察が来た。場所は榛前山、小川を上流に幾らか遡ったほとりだったと若い刑事が告げた。曰く、彼女の手には睡眠薬の瓶と思われるものが握られていて中身は空だったそうだ。死んだ状況を詳しく訊ねると刑事は首を振って答えを拒んだ。それでも重ねて頼むと彼は少し沈黙してから渋々口を開いた。直接の死因は現在調査中だがと彼は前置きした。藤田の口許と口腔内には吐瀉物らしきものが付着しており、おそらく睡眠薬の大量摂取後の嘔吐によって気管を詰まらせた可能性が高いとの事だった。聞いた俺はしばらく動かずに俯いていたが

やがて一度だけ頷いた。それから背後にいた父の判断で二階の部屋へ戻らせられた。机に肘を突いて俺は色々な事を考えた。刑事の顔は溶けたように覚えていなかった。考えている間刑事か父は一度も呼びに来なかった。刑事が家を辞した気配がしてからも階段を上る足音はしなかった。話を伺うのは日を改めて、という事だろう。

同じ日の午後、白い封筒が家に届いた。父は黙って部屋に入ってくるとそれを手渡ししてきた。差出人は藤田だった。封筒の真ん中に彼女の字で署名があった。消印はあの町のものになっていた。机でそれを開くと折り畳まれた便箋が一枚入っていた。読んだ。最後まで読み終えるともう一度文頭に戻って眺めた。しばらく便箋を手にしたままでいた。封筒に仕舞い直し机の上にそのまま置いた。

ベッドに仰向けに寝転がりながら三枚のルーズリーフを顔の前に掲げた。幾つもの崩れた走り書き。柿原に渡した小説の、起稿前にアイディアを記したメモだった。その文字に目を通していく。消しゴムで汚れた消し跡。消しカスが隅に付いている。勢いよく引かれた二重線。そのB5紙面に、俺が藤田について知っていた事、藤田に対して抱いていた事、全てが映写機でスクリーンに投げかけられるように映し出されていった。どれだけペンを走らせても、彼女と俺をそこにいくらだけ投影して物語を作り上げていっても欠けているものがあるという気が止まなかった。それでも手の動くままに書き上げた。

灰暗い靄がずっと疼いていた。いつの頃からか俺の中で形作られていったそれ——眼差しとも、衝動ともつかないもの——は例えようのない匂いを発しながらじつと横たわっていた。付かず離れず、ただそこにあるものとして、俺はそれを自分の中に見つめていた。その俺がただ見つめるだけだったものこそ、藤田が願っていた事とたがわなかった。無邪気なまでに死を願う続ける彼女は眩しかった。ただひたすらに。あの日の白い太陽のように。

力を抜いて腕を下ろした。ぱさりとルーズリーフが手を離れ床に落ちた。それから俺は目を閉じ、自身の呼吸音に耳を傾けた。

* * *

灰皿の上で震える炎。封筒の形が大方溶けたように崩れていた。やがて真っ黒になった紙の上でちろちろと炎がささやかに揺れるだけになると視線を外し俯いた。口の端からマールポロを離して紫煙を吐き出すとまだ充分な長さが残っているそれを灰皿に投げた。一抹の匂いだけが尾を引いた。部屋はすっかり夜の色になっていた。明かりを点けに立ち上がるうとしたが足に力が入らなかつた。その代わりに数時間前の記憶がよみがえった。勝手に映写機が回り始めるように。

何てことのない夏の午後。柿原が一年近くぶりに訪ねてきた。彼の提げたビニール袋。おぎなりな会話。並んでソファに腰掛けた。ビールの缶を開ける音。紫煙。滑ってゆくテレビの映像。会話。味気ないつまみ。沈黙。スピーカーの音声。二本目の缶が空になりかけたところで柿原は改まったように俺に向き直った。目だけは俺を見ていなかった。なんだか懐かしくなっちゃってね。ほら、もうすぐ四年経つでしょ。彼の取り出した封筒は角がやや丸くなっていた。俺はしばらく彼が持つそれにじつと視線を注いでから黙って奥の部屋へ行き抽斗を開いた。普段然程開ける用もない一番下の段。手紙を手にして戻った。互いの内容を見比べた。書き出しと結びだけは一字一句違わなかつた。

「この〈あの日の事〉って何だ」

柿原の手紙の丁度真ん中あたりにその句はあった。ただ一文、〈あの日の事を忘れるかどうかは、君の好きにしてください〉と。柿原は口を開かなかつた。ただつまみに手を伸ばしてそれを齧つた。逡巡を意味する沈黙だったのでろう。俺はただ待った。これまでのどんな沈黙より長い沈黙だった。だが質問を取り消すには短かつた。

「彼女が死にたがっていた理由を？」と柿原
俺は首を振つた。

「僕は知っている」

水面のような目。

「一度だけ、彼女に関係を求められたことがある。その時に教えてもらった。全部ね」
俺は息を吐いた。それからぬるくなつたビールを喉に流した。

「どんな関係を求められたんだよ」

どこまでも嘲りたくなる問いだった。柿原は目を逸らした。俺は空になつた缶を置いた。

「きつと一度でいいから満たされたかつたんだろうね」

「藤田は何と言つていた」

「・・・秘密。約束だからね」

「なあ」

「藤田さんは疲れていたんだよ。僕が言えるのはそれだけ」

そうだった。誰にも自身を曝け出さなかつたはずの藤田だからこそ。彼女が死を望んでいることを知っているだけで充分だと思えた。あの時胸の中を撫でたのは、確かに嫉妬だった。四年前、俺は惹かれていた。彼女と、彼女の向かうものに。それがこんな手垢の付いた感情に姿を変えたのは、いつの頃だつたらうか。

記憶の映写機が回転を止めた。おもむろにソファから立ち上がり手探りで壁際のスイッチを押して明かりを点けた。白い光が散らかつた机を照らし出した。俺は身を屈めて机の上を片付け始めた。ゴミをビニール袋に次々と入れていく。灰皿の中身も袋にぶちまけた。空の缶が立てる軽い音。全て片付け終えて机を拭くと時計を見上げた。七時二十一分。今夜は何もする気になれなさそうだった。

——了